エウメネス二世とアンティオコス四世*（二）

――前二世紀前半におけるヘレニズム君主の立場――

田中穂積

三　アンティオコス四世の王位継承
四　アンティオコス四世の対外政策と第六次シリア戦争
おわりに

三　アンティオコス四世の王位継承

アンティオコス三世が小アジアのマグネシア近くでローマ軍に敗れると（前一九〇年末頃）、彼はスキピオ（大アフリカヌス）から莫大な賠償金を要求され、また同時に名指された人質二十名については直ちに差し出すよう強要された。このなかにアンティオコス三世の子供で、後のアンティオコス四世が含まれていたことは確かである。彼らはエフェソスに集められ、ここからアンティオコス三世の使節やエウメネス二世、それにロドス、スミュルナその他小アジア各地からの使節と一緒にローマに向かうことになった。敗者の子供アンティオコスとローマに与して勝者側の代表的使節となったエウメネス二世が出合ったのは、この時が初めてであろう。これらの一行は翌年の初夏、ローマ

市に到着した[1]。このアンティオコスの年齢は、およそ十代の後半から二十歳余の間であったとおもわれる[2]。

その後、セレウコス朝では、アンティオコスの兄セレウコス四世がアンティオコス三世の王位を継承した（前一八七年）。セレウコス四世は、ローマの要請に従ったとおもわれるが、十歳くらいになった嫡子デメトリオス[3]をローマに送ったので、アンティオコスは人質の立場から解放された。彼はシリアへの帰途であろう、前一七八／七年にはアテナイに立ち寄っていたことが知られている[4]。

このようにアンティオコスは約十二年間ローマの事情を見聞したことになるが、その間の彼の行動については殆ど分かっていないし、また彼がローマにおいていかほどの影響を受けたかについても明らかでない。彼はローマにおいて公費で建てられた住居を持ち、またローマ元老院は彼を親切に取り扱ったので、人々は人質としてではなく、王のようにみなしたと伝えられており[5]、こうした表現からすれば彼にはかなりの知己があったとみてよい。しかしそれらの名前をあげることはできない。アンティオコスを人質に指名したスキピオ（大アフリカヌス）、あるいは後年エジプトに侵攻したアンティオコスに撤兵を命じたポピリウス・ラエナス[6]などがそうであったかも知れない。ことに前者の場合、次のようなことが考えられる。かつてアンティオコス三世はローマとの緒戦でスキピオの子供を捕虜にしたが、この王はマグネシア近くで敗北する前にその子供を彼に返している[7]。この後スキピオがアンティオコスを人質に選んだのは、彼はこのアンティオコスをローマにおいて養育するに足りる若者と見込んだからであるとする見方もできる。こうした観点をさらに推定したり、またアンティオコスの王位獲得後、ローマの制度の模倣とみられる彼の行為に論及したりすることは、いまここでは避けておきたい。

ところで、アンティオコスがアテナイに滞在中の前一七五年九月初め、セレウコス四世が宮廷の実力者であった宰相のヘリオドロスに殺害されるという事件が起こった。そこでアンティオコスをセレウコス朝の王位に即かせるため、援助したのがエウメネス二世であった。前篇にあげておいたように、エウメネス二世はアンティオコスがシリア

に入る前に彼にディアデマをとらせたことがうかがえ、このことは早々と彼に王位を宣言させたということができる。アンティオコスはエウメネス二世の軍隊の力を借りてシリアに帰還し、支配者の立場をえた[8]。こうした一連の経過には、関連する何らかの背後事情が存在したのであろうか。それについては従来、様々な憶測がなされており、ローマとエウメネス二世が反ローマ的なセレウコス四世を排除するため、ヘリオドロスを利用したとする見方もその一つであるが、ここでは問わないことにする[9]。

セレウコス四世には、ローマに留め置かれていたデメトリオスの他に、アンティオコスと名付けられていた幼児がいたことは間違いなかろう。シリアに帰還したアンティオコス、すなわちアンティオコス四世はこの幼児と共同統治を始めたとおもわれ、その後彼のエジプト侵攻（前一七〇年）までにはこの幼児を排除し、また彼の発行した貨幣に、セレウコス朝で初めて「テオス・エピパネス」（神として顕現した）の銘を付加したとみてよかろう[10]。本稿では、従来アンティオコス四世のヘレニズム化政策といわれてきたような内政に関する問題点の考察は省略し、次に彼の対外政策を取り上げることにする。

四　アンティオコス四世の対外政策と第六次シリア戦争

(一)　アンティオコス四世の第一回エジプト侵攻

アンティオコス四世のエジプト侵攻を現代史家たちは第六次シリア戦争（前一七〇―一六八年）と呼び慣わしているが、この戦いはポリュビオスがその帰結をピュドナの戦いとの関連において捉えたように、ポリュビオス以来、当時の東地中海域の政情のなかで考察されてきた[11]。この史家の記述を踏まえたリウィウスの見方をあげれば、アンティオコス四世はローマ人がマケドニア戦争で忙殺されている間に、妨害されることなくエジプトの王国と戦う魂胆で

あったが、また一方ではローマ人に援助することも約束していた、という表現をとっている[12]。このリウィウスのような端的な表現ないし解釈は、後に取り上げるポリュビオスの断片から読み取ることはできない。他方、ビッケルマンの見解によれば、ローマはアンティオコス四世とペルセウスの連携、さらには第六次シリア戦争の結果、その勝者とペルセウスの同盟を恐れていたのであって、アンティオコス四世がプトレマイオス朝との対立で釘付けされている機会を捉え、第三次マケドニア戦争に踏み切ったとする[13]。いまここでビッケルマン説の詳細を追う余裕はないが、アンティオコス四世がローマに敵対する意図を持ったかどうか、それに不分明とはいえ両戦の戦いにいたるまでの各動向ならびに戦争決定の時期等を検討してみるとき、ビッケルマンの構想は必ずしも妥当と言い切れない面がある[14]。これはさておき、次に若干の問題点を取り上げることにする。

リウィウスによれば、アンティオコス四世はローマ使節の来訪をうけたあと、前一七三年にこの王としては初めてとおもわれる使節をローマ元老院に派遣したとしている。そしてこれに対応した極めて友交的な元老院の外交姿勢は、当時ローマ人のペルセウスに対する憎悪の感情が高まっていたことから、このマケドニア王を意識してのことであったとみている。こうしたローマ側の態度は、同時期に元老院がプトレマイオス六世に対し、友交を更新する使節団を派遣していることからもうかがわれる。したがってこの段階で、リウィウスはアンティオコス四世とプトレマイオス六世の対立を取り上げる意図はなかったとおもわれる[15]。しかしアンティオコス四世には、リウィウスも指摘しているように、ペルセウスと合従する考えはなく、ローマとの同盟を求めたことは疑いないが、今後の対プトレマイオス朝問題で有利な条件をえるために、ローマの出方を感知しておく必要があったことは確かであろう[16]。

そこで、アンティオコス四世とプトレマイオス朝の対立問題にもどると、前一七三年頃には両者の関係は悪化していたとおもわれる。ポリュビオスやディオドロスは、アンティオコス四世の甥にあたる若いプトレマイオス六世の宮廷で、主導権を握ったエウライオスとレナイオスらの一派がコイレ・シリアの奪回をはかり、早くから戦争を画策し

ていたことを仄めかしている[17]。彼らのそうした行動は、おそらくセレウコス四世の殺害というセレウコス朝の政変に乗じたとみることも可能である。またポルヒュリオスの記述や『第二マカベ書』にみられる、コイレ・シリアそれにフェニキアにおける親プトレマイオス朝一派のアンティオコス四世に対する反感、またこの王がプトレマイオス六世側の敵意を察知して、それらの地域でおこなった示威行軍などは、それぞれの文脈からみてアンティオコス四世支配の早い時期とすることができる[18]。したがって双方の戦意は互いに高まったとみてよく、古代史家などの間でも、いずれを非難すべきかはそれぞれの見解や立場によって異なっている。いまあげたポリュビオスやディオドロスの見方に対して、たとえばリウィウスや反アンティオコス四世の立場を貫くユダヤ資料などは、この王に当初よりエジプト侵略の意図があったと表現している[19]。

さて、ポリュビオスによれば、前一七〇年（秋？）にアンティオコス四世はメレアグロスたちをローマ元老院に派遣して、プトレマイオス朝側が不当にもコイレ・シリア奪回の準備を進めていると訴えている[20]。前年の春、すでにローマとペルセウスは戦争に突入していたのである（第三次マケドニア戦争）。そこで、このメレアグロスのローマ派遣は、臨戦態勢を整えたアンティオコス四世が爾後の戦いを前以て正当化しておく意図や、対ペルセウス戦を続行しているローマの東方政策を探る目的などにあったとみてよい。またメレアグロスがローマに到着したとき、第六次シリア戦争が始まっていたとポリュビオスは述べており、このことを疑問視するむきはあるとしても[21]、そこからアンティオコス四世はローマの軍事介入はありえないと判断したと読み取ることができよう。一方、プトレマイオス六世側もローマ元老院に友交更新の使節を派遣したが、ポリュビオスによれば、この王はコイレ・シリアの諸都市をかつて不法にもアンティオコス三世に奪取されたと思い込んでいたので、その使節の主な役目はメレアグロスの言動を監視することにあったとする。ローマ元老院はこれら何れの使節にも即答を与えていない[22]。そこには、第三次マケドニア戦争の経過に焦点をおきながら、東方事情を見守ること、さらには両王朝の確執がローマにとって好都合であっ

たとする見方さえもできるのである。

そこで、第六次シリア戦争が始まるのであるが、プトレマイオス朝側について、ポリュビオスの記述を援用したとおもわれるディオドロスは、蓄財を専らとし、戦争経験のないエウライオスとレナイオスたちがまさに愚行というべき出陣を強行したという[23]。その機先を制したアンティオコス四世はエジプトに進撃し、カシオス山とペルシオンの間の戦闘で勝利を収めた。ここでアンティオコス四世は休戦協定を結んだのであるが、彼が捕虜を寛大に扱って敵の戦意を和らげたことは、デルタ地帯への突破口で戦略上の要衝ペルシオンの占拠を容易にした。このアンティオコス四世の休戦協定違背は、ポリュビオスによれば彼の王たる威風を損なうものであり、彼の難点の一つであるという[24]。一方、プトレマイオス六世はエウライスたちとサモトラケに逃亡したとおもわれる。また、それについてポリュビオスは、この王は王国を見捨てるという臆病な行為をとったが、それは側近のゆえであり、彼の天性によるものでないことは、後の信念ある勇敢な行動から知ることができると評している[25]。

その後、アンティオコス四世はナウクラティス近くに軍を進めていたとき、アレクサンドリアに復帰していたプトレマイオス六世が寄越した使者の一行に出合った。彼らは、プトレマイオス六世の成年祝賀のために来訪していたアカイア、アテナイ、ミレトス等からの使節であって、当時アレクサンドリアの宮廷会議を取り仕切っていたコマノスとキネアスにアンティオコス四世との交渉を依頼されていたのであった。その会談を取り上げたポリュビオスは、コイレ・シリアは元来セレウコス朝の所領であり、またクレオパトラ一世に付けられた嫁資でもないとアンティオコス四世に言明させている。そこには、第六次シリア戦争の遠因をあげておこうとするこの史家一流の見方がうかがえる。彼はそれからナウクラティスを経て、アレクサンドリアに向かった[26]。

しかし、アンティオコス四世はプトレマイオス六世と和解し、メンフィスに進みこの王をそこに呼び寄せた。このとき、彼があえてアレクサンドリア入城を強行しなかったのは、この国際都市で反感を買うことや、対ローマ関係を

悪化させることを避けるためであったとみてよかろう。では、伝統的な王都メンフィスに入った彼の意図は何であったか。たとえばポリュビオスは、この王にエジプトはプトレマイオス六世のものであると言わしめているが、他の古代史家は漠然とした表現をとっている[27]。ところがポルヒュリオスは、若年の王に偽りの友愛をみせたアンティオコス四世は、メンフィスでエジプトの伝統に従ってエジプトの支配権を掌握し、諸都市に押し入り、彼の父祖がなさなかったことをやって退け、そしてエジプトを荒廃させ、その富を浪費したという[28]。アンティオコス四世の意図は、プトレマイオス六世という傀儡王を操ることによって彼の勢力権を拡大することにあったとみてよかろう。もちろん彼は、ポルヒュリオスの表現するように征服者としてエジプトで多くの財物を収奪し、住民の反感を買ったことは疑いない。

ところが、アレクサンドリアにおいて、プトレマイオス六世の弟と妹にあたるプトレマイオス八世とクレオパトラ二世がアンティオコス四世に反抗した。そこでアンティオコス四世はこの都市の攻囲に踏み切ったが、しかしそれを中止して（前一六九年晩夏?）、その後シリアに引き揚げた[29]（同年冬?）。

このアンティオコス四世の行動について、従来いくつかの解釈がみられたが、いまそれに言及する余裕はないので、ここに一つの見方を述べておきたい。

まず第一点としては、アンティオコス四世のローマに対する外交姿勢である。前一六九年、彼がエジプトに侵入したあと、ローマ元老院の使節ティトゥス・ヌミシウスがエジプトに到着したが、その派遣がプトレマイオス八世とクレオパトラ二世がローマに救援を求めてからであったか、あるいはそれ以前であったかは不明である。ポリュビオスは、このヌミシウスが当時の複雑なエジプト事情を十分に解決できなかったと述べているようであるが[30]、しかしこの時期にアンティオコス四世はアレクサンドリアの攻囲を解いたとみることもできる。その後、なおエジプトに留まっていた彼は、ロドスの派遣した使節に和解の勧告をうけた。それは、ローマにおいてその年初に元老院からこの東方問題の対応を委ねられていたコンスル、クウィントゥス・マルキウスが、マケドニアの戦陣にあった彼を訪れたロ

ドスの使節に示唆したからであった。ポリュビオスによれば、アンティオコス四世はロドスの使節に対し、エジプトの王国はプトレマイオス六世のものであり、それについてはすでに約定を交わしており、彼は友であると表明したという[31]。ここにおいて、アンティオコス四世は、当時ローマの動向をよく把握していたロドスの勧告を受け入れるのが賢明であると判断したとみられる。そこで彼は弁明のためとおもわれるが、ローマに使節を送り、同時にローマ人に五〇タランタを提供し、またギリシア人のよき心証をえようとして若干のギリシア都市に一〇〇タランタを贈ったのであった[32]。彼はシリアへの帰途、エルサレムで親プトレマイオス朝派を弾圧しているが[33]、それがエジプトを引き揚げた理由とはみられない。

第二点は、戦略上の問題である。アレクサンドリアは海港都市であり、港を封鎖しないかぎり、この都市の攻略は容易でなかったはずである。ことに、この港とプトレマイオス王国の海軍基地キプロスの連携が確保されているかぎり、アレクサンドリア政府の海上行動は侵されることもなく、さらにはアンティオコス四世支配下のフェニキア、コイレ・シリアに干渉することも可能であったということにある[34]。それは、彼が再度のエジプト侵攻に際し、前以てキプロス島を占領したことからもうかがえる。

(二) アンティオコス四世の第二回エジプト侵攻

アンティオコス四世がエジプトを離れると、プトレマイオス六世はクレオパトラ二世の援助をえてアレクサンドリアに帰還し、彼と弟プトレマイオス八世は共同統治を始めた（前一六九／八年冬[35]）。リウィウスはこの事情を説明しているが、それはさておき、この史家によればアンティオコス四世は、アシアやギリシアにプトレマイオス六世の後見役を喧伝していた手前、この王がとった行動を背信行為とみなし、再度エジプトに侵入する口実をえたわけであるが、ともかくも彼は激怒して直ちに出陣の手配をしたという[36]。もっともアンティオコス四世はペルシオンに駐

屯軍を残しており、彼にはそうした事態の出来も計算ずみであったということができよう。

前一六八年、戦争準備を整えたアンティオコス四世はキプロスに艦隊をおくり、彼自身は春早くにエジプトに向かった。リノコルラ近くでプトレマイオス朝の使節に出合った彼は、キプロス島全土、それにペルシオンとその河口周辺の割譲を要求し、休戦期間を指定した。プトレマイオス朝側は、アカイア人に要請していた援助はえられなかったが、アンティオコス四世の要求を無視したとおもわれる。それで彼はペルシオンを海上から封鎖させ、また彼自身は陸路をとってメンフィスに入った[37]。今回、彼はエジプトの支配者として振舞ったと想定され、メンフィスの長官にクレオンなる者を据え、またアルシノエ地区を旧名であるクロコディロス（鰐）地区と呼んで、その入植者に指令を発したり、モイリス湖近くの神殿を破壊したりしている[38]。

さて、次にアンティオコス四世をエジプトから撤退させるに至ったローマ側の動向を取り上げておきたい。

前一六八年の年初、ローマ元老院はこの東方の王たちの戦いを止めさせるべく、ポピリウス・ラエナスらを使節として派遣した。それは、前年にアレクサンドリアのプトレマイオス八世とクレオパトラ二世がローマに送った使節の訴えを元老院が徴したためとみられる[39]。ポピリウスはカルキスからデロスに渡り、ここで滞留した。神聖視されたこの島は中立地帯として、対ペルセウス戦においても彼我の船隊が停泊し、情報収集には好都合な場所であった。そして彼は、その春マケドニアに渡ったアエミリウス・パウルスが指揮するローマ軍の動向を見守り、アンティオコス四世との最も効果ある折衝の時期をうかがった[40]。

ポピリウスは、アエミリウス・パウルスがピュドナにおいて決定的な勝利をえた（前一六八年六月二十二日）報に接すると、デロスからエジプトに向かった。その航行の途次、ロドスに立ち寄った彼は持ち前の激しい気性でもって、戦時中のロドス人の卑怯な態度を糾弾し、ペルセウスに味方した者たちを処断した[41]。七月上旬、このポピリウスは、当然ピュドナの戦いの結果を知ったうえで、アレクサンドリア郊外のエレウシスで待機していたアンティオコス四世

と出合った[42]。この会見に当たってポピリウスは、アンティオコス四世に即時停戦を命じた元老院決議を手渡し、後世の語り草となった傲岸な態度でもって彼に即答を迫り、承服させた[43]。ポピリウスにそのような態度をとらせたのは、ピュドナの戦いの後で作成されたと考えられる元老院決議と、また彼の激しい気性のゆえであったとみてよい。

こうして、アンティオコス四世はエジプトとキプロスから軍を撤収した。ここに古代史家たちは、ローマによってプトレマイオス王国の危機が救われたとみる。またポリュビオスは、アンティオコス四世は深く傷つけられたが、此の度ペルセウスそれに続いて、彼に起こった出来事は運命の然らしめる所であったと表現している[44]。もちろんアンティオコス四世は屈辱を味わったに違いないが、もし彼の脳裏にペルセウスからの手紙、つまり自由な市民国家と王は本来相容れないものであって、ローマはペルセウスの次にはアシア、そしてシリアを襲うであろう[45]という文言が浮かんだとすれば、彼にはローマと戦火を交えずに済んだという安堵の気持があったということもできよう。

その後、アンティオコス四世はダプネでの催物を内外に喧伝し、軍隊のパレードで始まった豪勢な祭典を一箇月以上にわたって執り行った[46]（前一六六年夏）。それでギリシア人はアンティオキアを訪れたがったのであったが、彼がこれを思い立ったのは、アエミリウス・パウルスがピュドナの戦勝後に催したアンピポリスの祭典を凌駕せんとしたからであったと伝えられる。その出費の多くをエジプトにおける略奪物でもって賄ったとされることは、彼には二度にわたったエジプト侵攻を一大征戦と見立てる意図や、また他方エウメネス二世の人気、つまりこの王がイオニアの都市連合に顕彰されたこと[47]などもアンティオコス四世の念頭にあったのかも知れない。諸家はその他、各様の説明を試みているが[48]、いずれにしても、それはヘレニズム世界、ことに主としてギリシア人を意識した王権の誇示であった。

概してポリュビオスは、アンティオコス四世がローマに対し怨恨を抱いていたという見方を取っており、ダプネの祭典後に来訪したローマの監察使に対しても、この王はそれを隠し通したと表現する[49]。しかしローマ元老院は、エウ

メネス二世とアンティオコス四世の連携を警戒し、彼らを追及する口実を見出そうとしていた[50]。前一六四年、エウメネス二世がローマ使節の執拗な糾問を受けたことはすでに述べたが、一方マニウス・セルギウスがアンティオキアに到着したとき、アンティオコス四世はすでに東方エリュマイスで没していたとおもわれる[51]。

おわりに

以上において、前二世紀前半におけるローマの東方進出と、それに対応したエウメネス二世とアンティオコス四世の対外姿勢を取り上げてきた。つまり両王の関係を主題とするのではなく、それぞれがいかにヘレニズム君主としての威信と王国の維持あるいは国力増強を計ろうとしたかについての考察である。それは、またローマ勢力増大の渦中で起こったエウメネス二世対ペルセウス、他方ではアンティオコス四世対プトレマイオス朝といった言わばヘレニズム世界における相克の一時期を画す問題でもある。

ところで、前一六八年ピュドナにおいてローマがペルセウスに戦勝すると、エウメネス二世とアンティオコス四世はまったくローマに威圧された。ローマに与したエウメネス二世はますますローマに疎んじられ、アンティオコス四世は侵攻地エジプトから撤退した。ここにローマの地中海支配が確立したとみるのはポリュビオスである。この時期の政情を考察するとき、多くをポリュビオス史料に負うていることはいうまでもないが、しかしそのことは彼の史観の影響を免れない一面性を持ち合わせているのである。この問題はさておき、彼の『歴史』はローマの興隆と支配を考察するというシェーマに拠っており、それは没落の史観ではないが、ローマの支配はまたヘレニズム世界の諸勢力の衰退であったということでもある。この世界史的展開をポリュビオスは運命の力とみたのである[52]。

最後に、当篇(二)は掲載予定誌を見合わせて本誌に変更したため、紙幅の制限上、かなりの論点を省略したことを付

記しておきたい。

註

＊ 前篇(一)は『関西學院史學』第二十三号（一九九〇年）、一二二一一五二頁。

(1) Polybios, XXI, 17, 1-18, 1; Livius, XXXII, 45, 13-21; Appianos, *Syr.* 38-39, 45.

(2) H. H. Schmitt, *Untersuchungen zur Geschichte Antiochos' des Grossen und seiner Zeit*, (Wiesbaden 1964), 21; O. Mørkholm, *Antiochus IV of Syria*, (København 1966), 38; cf. R. R. R. Smith, *Hellenistic Royal Portraits*, (Oxford 1988), 47.

(3) デメトリオスの生年については Polybios, XXXI, 1, 5.

(4) *Hesperia*, 51 (1982), 61-62; cf. Appianos, *Syr.* 45.

(5) Asconius, *Pis.* 12; Livius, XLII, 6, 9.

(6) Polybios, XXIX, 27, 2-6; cf. Iustinus, XXXIV, 3, 2.

(7) Polybios, XXI, 15, 1-5.

(8) Appianos, *Syr.* 45; Dittenberger, *OGIS*, no. 248; cf. A. J. Sachs and D. J. Wiseman, A Babylonian King List of the Hellenistic Period, *Iraq*, 16 (1954), 208.

(9) A. Bouché-Leclerq, *Histoire des Séleucides*, I, (Paris 1913), 237-242; É. Will, *Histoire politique du monde hellénistique*², II, (Nancy 1982), 303-306; J. A. Goldstein, *II Maccabees*, (New York 1983), 225-226.

(10) O. Mørkholm, *op. cit.*, 42-50; Id., *Studies in the Coinage of Antiochus IV of Syria*, København 1963; F. W. Walbank, *A Historical Commentary on Polybius*, III, (Oxford 1979), 284-285.

(11) Polybios, XXIX, 27, 1-13. 第六次シリア戦争に関しては W. Otto, *Zur Geschichte der Zeit des* 6. *Ptolemäers*, München 1934; J. W. Swain, Antiochus Epiphanes and Egypt, *CPhil.*, 39 (1944), 73-94; O. Mørkholm, *op. cit.*, (1966), 64-101; F. W. Walbank, *op. cit.*³ (Commentary III); É. Will, *op. cit.*, 308-325; E. S. Gruen, *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, I, II, Berkeley and Los Angeles 1984. 最近の論文は M. G. Morgan, The Perils of Schematism: Polybius, Antiochus Epiphanes and the 'Day of Eleusis,' *Historia*, 39 (1990), 37-76.

(12) Livius, XLII, 29, 5-6.

(13) E. Bikerman, Notes sur Polybe, *REG* 66 (1953), 479-506.

(14) Cf. F. W. Walbank, The Causes of the Third Macedonian War : Recent Views, *Ancient Macedonia*, II, (Thessaloniki 1977), 81-86.

(15) Livius, XLII, 6, 1-12.

(16) O. Mørkholm, *op. cit.*, (1966), 65, n. 5 ; cf. W. Otto, *op. cit.*, 33, n. 1 ; Livius, XLII, 26, 6-8.

(17) Polybios, XXVII, 19, 1-2 ; XXVIII, 1, 5 ; Diodoros, XXIX, 29 ; XXX, 2.

(18) Porphyrios, *FGH*, 260 F 49a ; *2 Makkabaion*, 4,18-22.

(19) Livius, XLII, 29, 5 ; *1 Makkabaion*, 1, 16 ; Iosephus, *Ant. Iud.* XII, 242.

(20) Polybios, XXVII, 19, 1-2 ; cf. Diodoros, XXX, 2.

(21) Polybios, XXVIII, 1, 1 ; F. W. Walbank, *op. cit.* (Commentary III), 324.

(22) Polybios, XXVIII, 1, 5-8.

(23) Diodoros, XXX, 15-16 ; cf. Polybios, XXVIII, 20, 5.

(24) 都ゝの経過ゝついゝて Porphyrios, *FGH*, 260 F 49a ; Diodoros, XXX, 14 ; Polybios, XXVIII, 18 ; Diodoros, XXX, 18.

(25) Polybios, XXVIII, 21, 1-5 ; Diodoros, XXX, 17.

(26) Polybios, XXVIII, 19, 1-20, 13.

(27) Ibid. XXVIII, 23, 3-4 ; Diodoros, XXXI, 1 ; Livius, XLIV, 19, 8 ; XL, 11, 1 ; 11, 8 ; cf. T. C. Skeat, Notes on Ptolemaic Chronology II, *JEA*, 47 (1961), 107-112.

(28) Porphyrios, *FGH*, 260 F 49a. ホメーロスにおけるカリストスの記述の載録箇所として W. Otto, *op. cit.*, 54-55.

(29) Polybios, XXIX, 23, 4; XXVIII, 22, 1 ; Livius, XLIV, 19, 6-9 ; cf. *1 Makkabaion*, 1, 20 ; Iosephus, *Ant. Iud.* XII, 243.

(30) Polybios, XXIX, 25, 3 ; cf. M. G. Morgan, *op. cit.*, 56-57.

(31) Polybios, XXVIII, 1, 9 ; 17, 1-15 ; 23, 1-5.

(32) Ibid. XXVIII, 22, 1-3 ; cf. Livius, XLV, 11, 8.

(33) *1 Makkabaion*, 1, 19-24; Iosephus, *Ant. Iud.* XII, 246-247; *Bell. Iud.* I, 31-33.

(34) *CAH*, VII, 1: *The Hellenistic World*, 2nd ed. (Cambridge 1984), 444 (H. Heinen); cf. M. G. Morgan, *op. cit.*, 62.

(35) Polybios, XXIX, 23, 4; Livius, XLV, 11, 2-7; J. D. Ray, *The Archive of Ḥor*, (London 1976), 127-128.

(36) Livius, XLV, 11, 8.

(37) Ibid. XLV, 11, 9-12, 2; Polybios, XXIX, 23, 1-25, 7.

(38) J. D. Ray, *op. cit.*, Text, no. 2: 14-20, 127; *P. Tebt.* III, no. 698=M.—Th. Lenger, *C. Ord. Ptol*^{2}., N° 32; *P. Tebt.* III, no. 781; P. M. Fraser, *Ptolemaic Alexandria*, II, (Oxford 1972), 211, n. 213.

(39) Livius, XLIV, 19, 13-14; F. W. Walbank, *op. cit.* (Commentary III), 361-362; E. S. Gruen, *op. cit.*, II, 657, n. 222; M. G. Morgan, *op. cit.*, 67-69.

(40) Livius, XLIV, 29, 1-5; 30, 1.

(41) Ibid. XLV, 10, 4-15.

(42) J. D. Ray, *op. cit.*, Texts, nos. 2, 3: 14-29, 127-128; F. W. Walbank, *op. cit.* (Commentary III), 404.

(43) Polybios, XXIX, 27, 1-10; Diodoros, XXXI, 2; Livius, XLV, 12, 3-6; Appianos, *Syr.* 66; Velleius, I, 10, 1; Valerius Maximus, VI, 4, 3; Porphyrios, *FGH*, 260 F 50; Iustinus, XXXIV, 3, 1-4.

(44) Polybios, XXIX, 27, 8-13.

(45) Livius, XLV, 24, 4; 13, 2.

(46) Polybios, XXX, 25, 1-26, 9=Athenaios, V, 194c-195f.

(47) Dittenberger, *OGIS*, no. 763=Welles, *RC*, no. 52.

(48) W. W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India*, (Cambridge 1951), 193-196; O. Mørkholm, *op. cit.*, (1966), 98; J. G. Bunge, Die Feiern Antiochos' IV. Epiphanes in Daphne im Herbst 166 v. Chr., *Chiron*, 6 (1976), 53-71.

(49) Polybios, XXX, 27, 1-4; 30, 7-8.

(50) Ibid. XXXI, 1, 6-8.

(51) Ibid. XXXI, 9, 1-4; F. W. Walbank, *op. cit.* (Commentary III), 464-465, 473-474.

(52) カネーパンクは、ポリビオスのそのローマ発展の運命とは合目的的であるような性格、あるいはストア学の神の摂理に

近いものとする。ポリュビオスの用いる運命という語義の多様性については F. W. Walbank, *Polybius*, (Berkeley—Los Angeles 1972); Id., *A Historical Commentary on Polybius*, I, (Oxford 1957), 16-26; The Idea of Decline in Polybius, in: R. Koselleck und P. Widmer, Hrsg., *Sprache und Geschichte*, Bd. 2: Niedergang, (Stuttgart 1980), 41-58. 大戸千之「ポリュビオスと司馬遷の歴史思想」『西洋古典学研究』三十一号（一九八三年）、五四—六五頁。

本稿(一)は平成一・二年度文部省科学研究費による研究の一部である。

——文学部教授——